論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	ZHANG　Lin（ちょう　りん）
○学位の種類	博士（文学）
○授与番号	甲　第 1300 号
○授与年月日	2019 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	「思想史的事件」としての「ラッセル来訪」再考 ―――第一次世界大戦後における「文明」と「近代」への思索
○審査委員	（主査）桂島　宣弘（立命館大学文学部教授） 山崎　有恒（立命館大学文学部教授） 長　志珠絵（神戸大学大学院国際文化学研究科・国際文化学部教授）

＜論文の内容の要旨＞

本論文は、1920 年から 1921 年にかけて、イギリスの哲学者バートランド・ラッセル（Bertrand Russell）が第一次世界大戦後のロシア・中国・日本を訪問・滞在したことを、子安宣邦が提示した概念＝「思想史的事件」と捉え（『「事件」としての徂徠学』青土社、1990 年）、当該期の日・中両国のメディアと知識人への反響、さらにラッセル自身の思想変化からその「事件性」を浮き彫りにし、もって第一次世界大戦後という時点が、その後の 20 世紀全体の思想史において決定的な画期となったことを明らかにしようとするものである。

第 1 章「B・ラッセルの『露・中・日訪問』及び 1920 年代初頭の東アジア」では、第一次世界大戦後の東アジアにおける「ラッセルの訪問」を一つの越境的「事件」として取り上げ、その意義及び成立の条件・背景を追跡している。日・中両国の知識人は、意図しないまでも互いの協働を通してラッセルの両国訪問を実現させた。梁啓超をはじめとした「研究系」知識人は、ヨーロッパ遊歴後の体験に基づく西洋文明への批判的考察から、「東西文明の化合」を企図し、青年学生・国民を啓蒙する目的でラッセルを招聘する。一方、日本の改造社は、梁たちのグループとのネットワークに基づき、大正期日本の思想界にイギリスの新思想を紹介するという目的をもってラッセル招聘に動いた。「ラッセルの訪問」という「事件」は、奇しくも第一次世界大戦後と向き合う日・中知識人の課題に応じて、トラ

ンスナショナルに実現したものであったとされている。

第 2 章「『文明』を守護する異端者――B・ラッセルが求めたもの」では、第一次世界大戦の戦中および終戦直後における、ラッセルの政治行動および彼が著した 4 冊の政治論を分析し、その思想転回過程を検討している。とりわけ日・中の知識人から最も注目されていたのは、ラッセルの政治理論を支える「衝動理論」であった。ラッセルは、史上未曾有の総力戦を引き起こした原因は、人間の「衝動」を抑圧し、かつ歪めてきた経済（私有財産制）・政治（国家の集権）制度にある一方、科学における倫理的価値の没却と、政府・メディアの煽動によるものだと分析する。したがって、歪んでいる「所有的衝動」から「創造的衝動」へと導く教育と制度の改革、ならびに共同体の再建が重要であると説く。具体的には、ラッセルが最初に選んだ組織原理は、サンジカリズムであったが、1917 年頃より社会の各階層の利益を調合するギルド社会主義を擁護するようになったと結論づけられている。

第 3 章「『新しい宗教』とロシアの失敗――ラッセルのボリシェビズム論とそれが惹起した波瀾」では、訪露後の著作『The practice and theory of Bolshevism』（1920）を分析し、その東アジアでの伝播過程を論じている。ラッセルは、ボルシェヴィズムに対して、自らの倫理的信条に反するため擁護できないこと、史的唯物論・マルクス主義経済学、ひいてはボルシェヴィズムが論理的誤りを内包している一種の「新しい宗教」であること、ロシアでは、その歴史的必然性と意義は評価され得る一方、西欧の政治改革者が採るべき普遍的方法ではないことをのべている。しかし訪中後のラッセルは、北京大学の知識人らとの討議などもあって、ボルシェヴィズムに対する態度を転回させ、後進国の近代化手段として、ボルシェヴィズムを中国に勧めるに至った。ラッセルの議論に対し、日・中両国の反応は、マルクス主義者たちはコミンテルンの極東工作もあって激しく反発したが、主にラッセル本人と直接的な接触を持った知識人、張東蓀や土田杏村などがラッセルの主張の積極的擁護に回ったことが論じられている。

第 4 章「『小国寡民』論と『共産主義体制』――長谷川如是閑とラッセルの交錯」では、ラッセルの日・中訪問前後における、日・中のメディアと知識人らのラッセル論を見るとともに、ラッセルの中国滞在中の思想の変化・転回を検討している。中国に関していえば、当該期の民国は「新文化運動」後期の時点にあり、ラッセルの「分析哲学」の受容は「科学」パラダイムの全面的推進とともに受容され、やがて 1930～40 年代以降の清華大学などでの中国現代哲学の形成に至ることとなる。「大正デモクラシー」期にある日本の思想界では、主権分散・民選政治の樹立を目的とする政治的文脈、とりわけ「多元的国家論」としてのギルド社会主義、ホブハウス理論の紹介として、ラッセルの政治論は受容された。具体的には、長谷川如是閑はラッセルの理論を敷衍しながら中国改革論を打ち出しているが、それは日本に実現させたい自らの政治的理想を、その中国改革論に託したものであったと分析されている。なお、ラッセル自身は、近代西洋文明の反省と再生に立って、ロシアと中国の農業帝国の状況、さらに戯画的に西洋追従している日本を見て、第一次世界大戦は

人間の生存競争と闘争本能を煽動するイデオロギーの対立に元凶があったという確信を強め、それは 1923 年の『The Prospects of Industrial Civilization』として結晶したと結ばれている。

第 5 章「社会改造と文化主義の間――土田杏村における新カント主義とギルド社会主義」は、ラッセルと土田杏村の主張を通して、当該期日本の言論状況を分析している。ラッセルにとって近代日本は、西洋近代の産業主義・帝国主義から生まれた「奇形児」であった。ラッセルは日本に対しては、西洋の宗教・道徳・倫理といった形而上学の摂取という処方箋を説く。一方、ラッセルから人格的にもっとも影響されたといえる土田杏村は、ラッセルの問題意識の上に、「文化主義」をもって、「近代」の問題を解決し、国家の「改造」を目指そうとした。しかし「共同体」の再建を国家に託したその形而上学は、1930 年代以降の日本の国家主義化に対して無力なものであったと展望されている。

終章では論文全体がまとめられ、第一次世界大戦後に提示されたラッセルの問いが、第二次世界大戦をへた今日に至っても、なお「未完の問い」として積み残されており、この意味では、ラッセルが発した問題、およびそれ向き合った日・中知識人の議論は、なお多くの課題をわれわれに問いかけていると結ばれている。

＜論文審査の結果の要旨＞

第一次世界大戦後のロシア・中国・日本へのバーランド・ラッセル訪問を一つの「思想史的事件」として捉え、その「事件」に刻印されている意義を、日・中思想界・ヨーロッパ思想界の動向と関連づけて明らかにしている本論文は、第一次世界大戦こそが現代思想の画期的始原となっていること、および現代に至る日・中の分岐をも示唆する原初的地点となっていることを示そうとした労作である。とりわけ次の三点において本論文は、思想史研究に新しい地平を切り開いたものと評価できる。

第一に、この時点での思想界は、既にメディアとの関連を抜きにしては存在し得ない時代に入っていた。それこそが、現代に至るこの時代の一つの始原性を象徴的に物語るものといえるが、同時にそれは第一次世界大戦後の思想研究が、検討すべき範囲を一挙に拡大しなければならないことを物語っている。本論文は、ラッセルはもとより、梁啓超、張東蓀、土田杏村、長谷川如是閑など、一人一人がメディア界に登場した幅広い活動分野を有する知識人であるにも拘わらず、かれらの言説のほぼ全てを射程に入れて精査・検討したもので、本論文の成果はこうした「メディア型知識人」に正面から挑み、第一次世界大戦を挟んでのラッセルを囲む思想空間を鮮明に描きだしたことに求められる。

第二に、既に指摘されてはいるものの、凄惨な破壊をもたらした第一次世界大戦こそが、それまでの学術の「無力性」への深刻な反省をもたらし、それが人文科学（哲学・歴史学）・自然科学などにおける、今日に至る画期であったということを、ラッセルの問題提起やそれに応えようとした当該期日・中の知識人の思想動向を通じて、きわめて説得的に示したことである。とりわけ、中国「新文化運動」のその後の分裂や大正期日本のリベラリズム

思潮の動静などに、ラッセル訪問が密接に関わっており、かくて日・中の思想史がラッセルを媒介として共時的に展開・分岐していったとする主張は、今後の研究が参照すべき重要な論点である。

第三に、日・中知識人のラッセルとの向き合い方の相異こそが、まさに日・中のこれ以降の思想転回過程さらには歴史過程そのものの分岐となったということが、本論文全体で明らかにされていることである。とりわけ、新たに思想界に登場したボルシェヴィズムの受けとめ方、ラッセル自身の批判と立ち位置、民国中国でのボルシェヴィズムの受容（共産党の成立)、日本の知識人のボルシェヴィズム論などは、今日的視点から読んでみても、きわめて興味深いものとなっており、いずれも現代的再検討が要請されているものと評することができる。このことは、審査委員一同が一致して指摘したところであり、奇しくも第一次世界大戦が現在に至る大きな画期であったことの一つの証左ともなっている。

以上の達成に加え、他に評価できるものとしては以下の点を挙げることができる。①ラッセルと中国、ラッセルと日本に関する先行研究は、日・中両国において一定存在しているものの、本論文は日・中さらにヨーロッパの思想界を、文字どおりトランスナショナルに横断した研究となっていることである。この研究のためには、博士論文としては当然の作業とはいえ、ラッセルの英文原著・日本語翻訳書・中国語翻訳書を精読しなければならず、それを成し遂げた点も、成果の一つとして指摘しておきたい。ラッセルの引用が、全て原文からの申請者の翻訳であることも、評価できる。これと関連して、日本語訳のないラッセルの著作を精査した作業も、新たな史料の学界への紹介という意味で価値あるものといえよう。②今日の日本近代思想史研究では、あまり取り上げられることの少ない土田杏村、長谷川如是閑などの大正期「メディア型知識人」について、ラッセルや第一次世界大戦後の思想界という視点から、再評価を求めたことも評価できる。土田杏村論、長谷川如是閑論としても今後の発展が見込まれるものとなっている。

本論文の問題点として指摘されたことは以下のとおりである。第一に、本論文の構成がもう少し整序されるべきであったこと。各章がそれなりの完結性を有していることは認められるものの、五章立てとした際に、やや重複が見られることも気にかかった点である。今後公刊する際には、この点は是非是正してほしい点である。第二に、「メディア型知識人」を素材としていることからくる問題ともいえるが、全体に叙述がやや散文的になっていること。この点は必ずしも欠点とはいえない本論文の「読み物」としての面白さにもなっているものの、思想分析としてはやや分析的ではない印象を与えている。ラッセルの紀行文の引用など、はたして必要な引用であったのか疑問が残る点もある。第三に史料の読みにやや精緻さに欠ける点が認められること。思想研究では、とりわけ概念の緻密かつ正確な理解が重要であり、この点は是非留意して頂きたい。

以上の問題点・課題が残るものの、本論文はまさしく申請者が一生取り組みうるテーマの現段階での一つの集約ともいえるもので、方法論や実証性の面でも、きわめて高いレベルにある論文と評価できる。日本語の完成度も高く、英語からの翻訳も正確である。中国

語を母語とする留学生の日本語論文としては秀逸の出来といわなければならない。本論文は、しかるべき修正を施すことで、公刊できる内容であるというのが、審査委員の一致した結論であった。以上により、公開審査での口頭試問結果を踏まえ、本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

本論文の公開審査は 2019 年 1 月 15 日（火）午後 5 時から 7 時まで末川会館第二会議室で行われた。審査委員会は、本論文がきわめて優秀なもので、十分な独創性・体系性、高い水準の学術的価値をもつものとの結論に至った。本論文の日本語叙述、英語・中国語・日本語の引用史料および提出された英文要旨から、中国語を母語とする申請者の日本語（現代語・大正時代語）・英語の卓越した水準の力量が窺える。申請者は、これまで発表してきた査読付も含めた学術論文、数多くの国際学会での報告、日本学術振興会特別研究員としての活躍などで、すでに日・中の学界において若手研究者としての地位を確立している。

以上の点を総合的に判断し、本論文は、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、「博士（文学　立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。